

モーツァルト夫妻が描かれた小さなパステル画を巡って

野口秀夫

1. はじめに

鳥代：ランゲの描いたモーツァルトの未完成の肖像画はコンスタンツェが「本人そっくりです」と言っていました^{注1}。さらにナンネルが“小さなパステル画”と呼んだ別の肖像画があった^{注3}、こちらはモーツァルトが実家宛てに「[新婚二人の]二枚の肖像画もあとから送ります。[...]ぼくには二人ともそっくりに見えるし、あの絵を見た人たちはみんなぼくと同意見です」^{注2}と言っています。本人お墨付きのこの肖像画こそ見てみたいものですね。

犬輔：ナンネルが所有していたその小さな肖像画は現在行方不明になってしまったんですね。

教授：ヴィンセント・ノヴェロがナンネルの家を訪問した 1828.7 には「部屋の隅に [...] モーツァルトのミニアチュア画があった」と報告されており^{注4}確かに存在していたが、その後は消息不明だ。ところでノヴェロは 1829.8 (ナンネルの死の 2 か月前) にナンネルを再訪問し「彼女は長いこと彼女自身の応接間のソファに掛かっていたままの、額縁ももとのままのモーツァルト肖像を私に贈ってくれた」と書いている^{注5}。ミュンスターは「これは確実に彼が既に見た“モーツァルトのミニアチュア画”と同一である」と言い「パステル画はイギリスのどこに留まっているのだろうか」と再発見を期待している^{注6}。だが文脈からは応接間のソファに掛かっていたのはポッシュの版画であって^{注7}パステル画ではなかった。

鳥代：もし残っていたとしたらどんなにか素晴らしいことでしょう。肖像画そのものでなく、絵の特徴が分かる資料とか、何か手掛かりになるものだけでも残っていないかしら。

教授：それだったら、ナンネルがモーツァルトのいくつかの肖像画について B&H 社とやり取りした手紙があるから、それらを読んでみるのが有益だろう。

2. ナンネルの B&H 社宛て手紙から分かるモーツァルトの肖像画の評価

鳥代：では、ナンネルが B&H 社の要求に応じて回答した手紙を順に見ていきましょう。それぞれの手紙から絵画に関する部分を抜粋します。まず 1803.5.29 付けです：「私は弟の肖像画を 3 つ持っております^{注8}。最上のは家族を描いた大きなものです(図1)。私が存じておりますよい画家が複写を 8 フローリンで郵送してくれるとのこと。複写をご所望でしたらお申し付けください。すぐにご返事を差し上げます」^{注9}。



犬輔：コンスタンツェの 1802.2.17 付けの手紙には B&H 社が横顔(アン・プロフィール)でなく、正面からのもの(アン・ファス)を要求していたことが書かれていました^{注10}。それから 1 年以上経ってナンネルにも同じ要求が回ってきたと考えることができますね。

鳥代：家族の肖像画(図1)は正面からの顔ですから B&H 社はすぐに複写を注文したのでしょう。ナンネルは 1803.10.12 付けでこう報告しています：「画家は急ぎの仕事がたくさん抱えていたため、来たのは初めてでした。彼は弟の肖像画を大きな家族の絵から複写しつつあり、顔の部分は完全にオリジナルから複写し終わりました。貴下のお気に召せばと願っております」^{注11}。



図1 上：家族の肖像画、下：拡大図

犬輔：現在進行形の報告は生々しく、現場が目には浮かぶようです。

教授：余談になるが、『書簡全集』にはこの手紙の梗概のみが「画家は彼女の弟の肖像画を大きな家族画から複写しつつあった」と載せられていた^{注12}。その後モツァルテウムがオリジナルを手に入れたのだろう、今では DME

(Digital Mozart edition) サイトに全文がファクシミリとともに載せられている。以前にも紹介したが、インターネット時代にはこのようにモーツァルトの新たな資料が次々公開される。鳥代さんがその恩恵を早速ここに披露したのは流石だね。

鳥代：1803.11.7にはその複写画が発送されました：「私の弟の肖像画の複写が昨日の郵便にすでに託されたことをここにご報告いたします。肖像画をしばしば描く画家本人に梱包させましたので損傷することなくお受け取りになることでしょう。描画と梱包とで12フローリン立て替えております。オリジナルを見た方はどなたも良い出来だと申しますので、得心いただけることを願っております。絵は達筆ではありませんが（nicht auf einen feinen Pinsel）オリジナルに全くよく似ておりますのでご満足いただけると思っております」^{注13}。

大輔：そして既に何回か部分引用した1804.1.4付けの手紙が来るんですね^{注14}少し詳しく引用しましょう。「私の弟の肖像画があなたの期待通りでなくお気の毒です。とは申しても私だけでなく弟の知人の誰でもがそれが弟に全くよく似ていると認めることを確認いたします。また私は一人の人物の肖像画というものをそう多くは所有しておりませんが、それらは元来本人に似ているものでも、それぞれが異なった様相を呈するものであると告白せざるを得ません。私が所有するもっとも古い絵画は6歳の子供の時のもので（図2）、また私は彼の銅版画を持っており、それは1764年にパリで父、弟そして私が描かれそして彫られたものです（図3）。1773年にはイタリア帰りの彼が描かれイタリアの色【黄色い顔色】を齎しました（図4）。1779年〔正しくは1780晩秋-1781中頃〕には大きな家族画が描かれました（図1）。貴下はこの複写をお持ちです。

1783年に彼はウィーンから肖像画を送ってきました。非常に小さいパステル画です。複写を作成することはできますが、横顔です。この画家は正面からのものを描ける状況にはないでしょうし、完璧に似ることを保証できる状況にはないでしょう。ご所望でしたらほかの画家たちにそれを受けてくださるか、料金がどのくらい高いか問い合わせいたします^{注15}。

私の持っている彼のもっとも若いものはウィーンの銅版画ですが、ほかの若いころの絵画とは事実全く似ておりません。しかし、彼の観相からはよき神が与えたもうた天才や才気を知ることができないと私は姉として告白せざるを得ません。——これで一人の人物を見終わりました」。ここに述べられている“最も若いウィーンの銅版画”を『書簡全集』注釈^{注16}では1789年ポッシュ作の銅版画だとしていますが、ナンネルがそのコピーを確かに持っていたものの^{注17}、“最も若い”という表現と矛盾します。

教授：そうだね。おそらく1762年9月半ばから1763年の第1回ウィーン旅行で銅版画が彫られたのだろう。但し記録にはなく、現物も残っていないが。

鳥代：この手紙には沢山のことが書かれていますね。まず、家族の肖像画から複写した正面からのモーツァルトの肖像をB&Hは気に入らなかったのですね。絵の素人であるナンネルでさえ“達筆でない”と譲歩せざるを得なかったことから察するに複写の出来が良くなかったのでしょうか。またナンネルは横顔のパステル画の画家あるいはほかの画家に正面向きに描いてもらう案を模索してもいたんですね。コンスタンツェも1802.2.17、ランゲに正面向きの肖像を描くよう依頼する案を提示していたのでした^{注18}。そして、ナンネルが最後に肖像画から天才や才気を読み取ることはできないと言っているのは、B&H社の問いかけに答えてのことでしょう。当時既にモーツァルトが天才だと言われ始めていたことがこれから分かりますね。

教授：“観相”をナンネルはPhisonomieと綴っているが、Physiognomieのことで、“人の性質は外観から推定することができる”とする中世の信念だ。現代では“観相学”や“人相学”として継承されている^{注19}。



図2 大礼服を着たモーツァルト



図3 演奏するモーツァルト親子



図4 イタリア帰りのモーツァルト

3. ゾンライトナーからの要求に応じてナンネルが選んだモーツァルトの肖像画

鳥代：ザルツブルクで活躍していた画家バルバラ・クラフトの描いた肖像画があるわね(図5)。モーツァルトの死後に描かれた肖像画としては評価が高いわ。

犬輔：制作にはナンネルが関与していると聞いたことがある。

教授：それは 1819 年のことだ。有名作曲家たちの油彩肖像画の収集をしていたヨーゼフ・ゾンライトナーがナンネルに宛ててバルバラ・クラフトに肖像画を貸してあげてほしいという手紙を送ったのが発端だった^{注20}。

鳥代：それに回答したナンネルの 1819.7.2 付け手紙があるわ^{注21}。「[...] [友人の] 宮中顧問官フォン・ドロスディック [...] がその画家を私のところに派遣し、彼女は [私が所有する] 全部で 3 つの [モーツァルトの] 絵を見ました。一つは彼がイタリア旅行からの帰郷時に描かれたもの(図4)で、最も古く 16 歳の時ですが、重篤な病気から回復したばかりだったので病み上がりの黄色い顔をしています; 家族の肖像画(図1)の彼は 22 歳 [正しくは 24-25 歳] でよく描けています。そして彼が 26 歳の時のミニアトゥール (miniatur) は私が持っている最も新しいものですのでこれを先ず画家に見せました; 彼女から音沙汰がなかったのはそれを拡大するのが難しいからだったようです。それで私は家族の肖像ともう一つ [図4のこと] も見せました。[...] 彼女は家族の肖像からコピーをとることを欲し、ミニアトゥールから特徴のみを抽出することを欲しました。何故ならこの絵の方が彼の容貌が大きな絵 [家族肖像画] よりも年取って見えるからです」。



図5 バルバラ・クラフトのモーツァルト

犬輔：家族の肖像画を後になってから見せたのは、B&H 社との苦い経験があったからですね。ミニアトゥールとはすなわち小型のパステル画のことで、モーツァルトの年齢を上げるために、年嵩(としかさ)の表徴のみが抽出されたのでしょけれど、ぼくにはそのパステル画を復元するいい考えが浮かびました。“家族の肖像画+パステル画=クラフトの肖像画”と考えれば、“パステル画=クラフトの肖像画-家族の肖像画”が成立します。この式を解けば紛失したパステル画のエッセンスが復元できるかもしれないですよ。

鳥代：何事も理論通りにはいかないものだけれど、挑戦してみる価値はあるわね。

教授：お手並みを拝見するとしよう。

4. 二つの肖像画の差分を取ってみよう

犬輔：二つの肖像画の差分を取るの簡単です。まず、二つの肖像画をモノクロにし、それぞれを“画像A”“画像B”とします。そして“画像B”の白黒を反転したものを、“-画像B”とするんです。

鳥代：分かったわ。“-画像B”を半透明にして“画像A”と重ねるのでしょ。そうすると“画像A-画像B”すなわち差分を取れるというわけね。



図6 画像A(クラフトの肖像画から) 図7 画像B(家族の肖像画から)

犬輔：では早速やってみましょう。“画像A”がクラフトの肖像画、“画像B”が家族の肖像画ですよ。それぞれ図6、図7に示します。

鳥代：ちょっと待って。家族の肖像画のモーツァルト(図7)は顎が出ているようだよ。図を見ると、モーツァルトはこちらの方を向くために首を振っているのね。そのとき身体はクラヴィーアを弾く前かがみの姿勢のまま顔だけ少しのけぞって上を向いたのだよ。

教授：細かいところまでよく観察したね。差分を取る前に大きな差は解消しておいた方がいい。
図 7 を時計回りに 1 度だけ回転させておくことにしよう。

犬輔：では、画像 A と、画像 B を 1 度回転・白黒反転・半透明化して重ねてみましょう (図 8)。



図 8 左：クラフトの肖像画から、中央：家族の肖像から (1 度回転・白黒反転・半透明)、右：差分

鳥代：これから何が分かるのかしら。

犬輔：二つの画像が全く一致していれば全体が灰色になります。黒が残っているところは“クラフト”の黒いところが“家族”で黒くない、白が残っているところは“クラフト”の白いところが“家族”で白くないということですから……。ややこしいですけど……。

鳥代：黒いところは左オデコ、右顎などですね。白いところは眉の下、上唇などです。鬘や装飾品の部分は除くわよ。これらの差異から小型パステル画のエッセンスは、①面長・オデコの後退、②スリムな顎の線、③引き締まった口元、④彫りの深い眼窩だと分かるわ。でも、そのことは部分を拡大して比較しても分かることよ (図 9)。鼻は変わっていないのね。

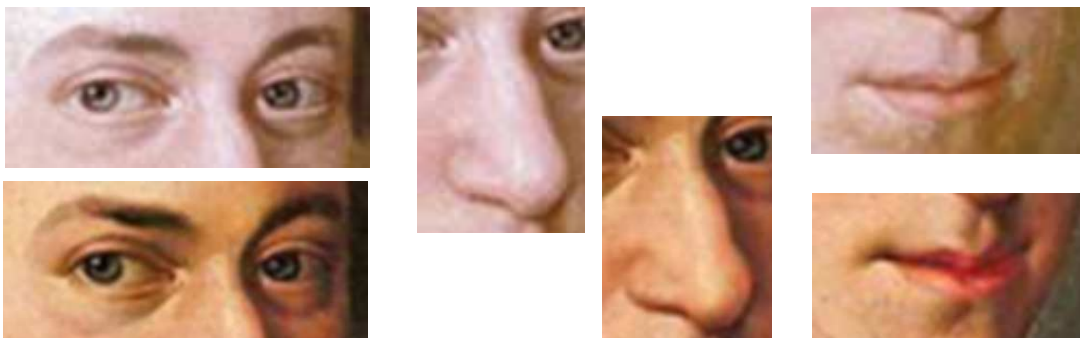


図 9 上：家族の肖像画から (1 度回転)、下：クラフトの肖像画から

5. 二つの肖像画を足し合わせてみよう

犬輔：ぼくはこれで満足はしませんよ。差分があるなら足し合わせもやってみましょう。

鳥代：足し合わせで何が分かるのかしら。

犬輔：それは見てのお楽しみ。二つのやりかたでご披露いたしましょう (図 10、図 11)。

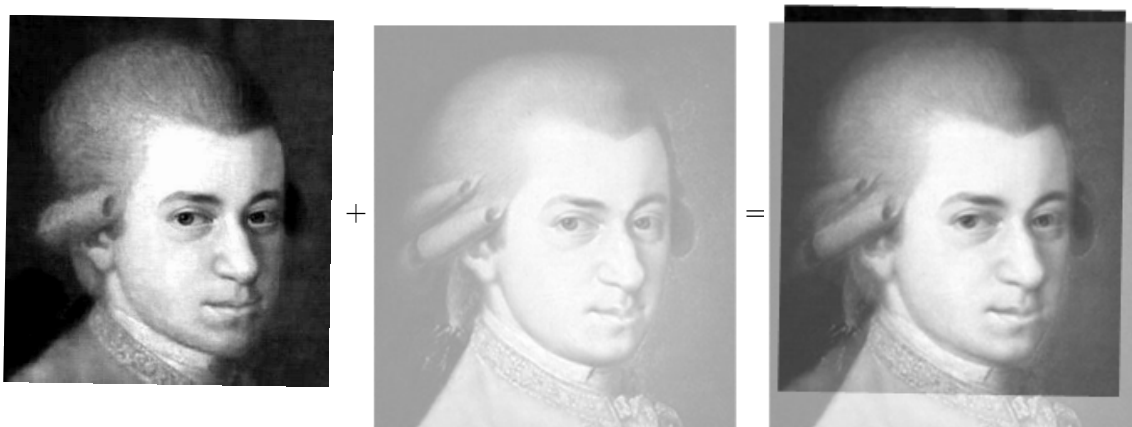


図 10 左：家族の肖像画から (1 度回転)、中央：クラフトの肖像画から (半透明)、右：足し合わせ

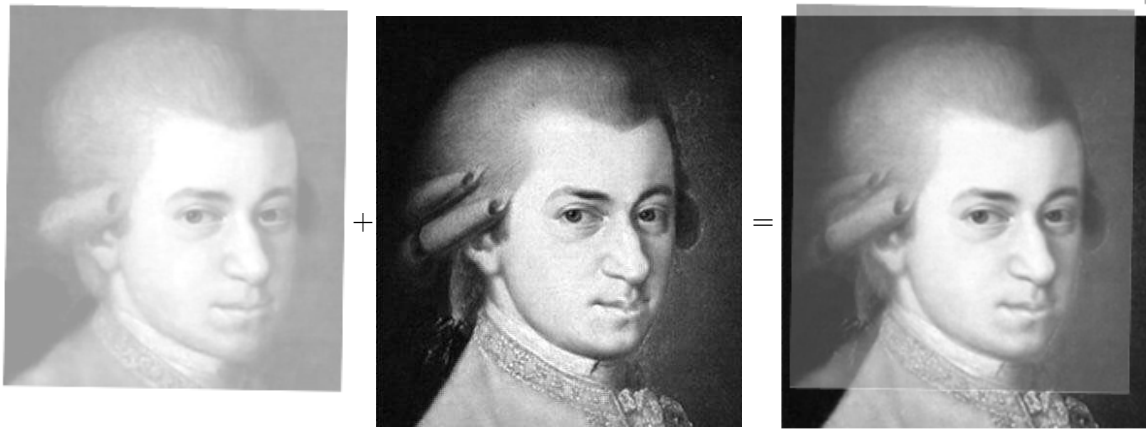


図 11 左：家族の肖像から（1度回転、半透明）、中央：クラフトの肖像画から、右：足し合わせ

鳥代：あーっ、図 10 と図 11 の右端の肖像はそれぞれ家族の肖像画のモーツァルトでもクラフトの肖像画のモーツァルトでもない中間のヴァーチャルな肖像だわ。でもまさかそれを 24 歳と 26 歳の間でモーツァルト 25 歳の肖像だと言うのではないでしょうね。

犬輔：そうは言いません。足し合わせにより両者の小さな差異が埋没することによって、大きな、根本的な差異だけが残るんです。その結果としての図 10 の足し合わせ図と、図 11 の足し合わせ図を較べれば、面長になったことが大きな差異だと分かるでしょう。

鳥代：オデコの引っ込み、スリムな顎の線、引き締った口元、彫りの深い眼窩よりも、面長であることの方が大きな相違点だと言うの？ でも、よく考えると、面長かどうかは横顔のパステル画からではむしろ一番分かりにくい特徴なのではないの？

犬輔：パステル画のエッセンスが面長であることだとは言ってませんよ。そうではなくて、この手法により検討すべきポイントを浮かび上がらせることができたと言いたいんです。

鳥代：すると面長にしたのはクラフトの勇み足かもしれないと指摘できるということなのね。

犬輔：大いにその可能性はあります。小型パステル画のエッセンスはスリムな顎の線、引き締まった口元、彫りの深い眼窩に留めておくのがいいでしょう。

教授：いろいろな手法によって様々な評価が出てくるのは議論を進めるきっかけとして捉えれば好ましいことだ。諸君たちの議論を聞いていてそれを実感したよ。

絵の出典

図 1：Johann Nepomuk della Croce (1736–1819)：モーツァルト家族の大肖像画。リネン上に油彩、1780 年晩秋-1781 年夏、140.4×187.6cm。ザルツブルク、国際モーツァルト財団、モーツァルト・ムゼウム&アルヒーフ。

図 2：Pietro Antonio Lorenzoni (1721–82)？：礼服のモーツァルト。リネン上に油彩、1763 年、84.1×64.5cm。同上。

図 3：Jean-Baptiste Delafosse (1721–75)：二人の子供と父モーツァルト。カルモンテルの水彩画による銅版画、パリ 1764 年、36.8×21cm。同上。

図 4：Martin Knoller (1725–1804)？：モーツァルトの肖像画。象牙のミニチュア、5.2cm。同上。

図 5：Barbara Krafft (1764–1825)：モーツァルトの胸像。リネン上に油彩、1818/19 年、54×44cm、ヴィーン、ヴィーン楽友協会コレクション。

注

注 1：ネリーナ・メディチ・ディ・マリヤーノ／ローズマリー・ヒューズ共編・小池滋訳『モーツァルト巡礼 1829 年ノヴェロ夫妻の旅日記』（抄訳）、秀文インター・ナショナル、1986 年、47 頁

注 2：1783.4.3 付けモーツァルトの手紙、『邦訳書簡全集』V 356 頁

注 3：1804.1.4 付けナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.436–7

注 4：前掲『モーツァルト巡礼』54 頁。「[ナンネルの] 部屋の別の隅には彼女 [=ナンネル] のミニチュア画——彼女 [=ナンネル] の息子のミニチュア画とモーツァルトのミニチュア画があった」とあり、コンスタンツェのミニチュア画が言及されていない。1804.4.30 のナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.439 には「その絵 [モーツァルトの横顔の絵=パステル画] は私の義理の妹 [コンスタンツェ] の絵と一緒に部屋に飾ってある」と書かれていた。

注 5：前掲『モーツァルト巡礼』174 頁

注 6：Robert Münster: Die Mozart-Porträts des Joseph Lange in: Mozart-Studien, Bd.19, Tutzing, 2010, pp.281–298

注 7：前掲『モーツァルト巡礼』54 頁 編者注

注 8：3 つの絵画とは家族の肖像（図 1）、イタリア帰りの肖像（図 4）、パステル画である。版画は数に入れられてない。

注 9：1803.5.29 付けナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.435

注 10：1802.2.17 付けコンスタンツェの手紙、『書簡全集』IV p.414

注 11：1803.10.12 付けナンネルの手紙（DME）

注 12：1803.10.12 付けナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.435

注 13：1803.11.7 付けナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.435–6

注 14：1804.1.4 付けナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.436–7

注 15：前掲 1804.4.30 のナンネルの手紙によれば B&H 社はパステル画借用を申し出、ナンネルはそれを断っている。

注 16：『書簡全集』注釈 VI p.585

注 17：前掲『モーツァルト巡礼』54 頁

注 18：1802.2.17 付けコンスタンツェの手紙、『書簡全集』IV p.414

注 19：『書簡全集』IV p.202。ナンネルは既に 1792 年の B&H 社宛て手紙で“観相家 Phisionemist [Physiognomist]”という言葉を使っている：「残念なことに近い者よりも赤の他人の方が人の弱点をよく知っているものです。また、子供は赤の他人より父親に従順です。私の父はそのような父であり、またむしろ良き観相家でもありましたから、その父をさておき、あなたやザルツブルクの人たち以上に記述することは私にはできないのです」。

注 20：1819.7.2 付けナンネルの手紙への注釈、『書簡全集』VI p.603

注 21：1819.7.2 付けナンネルの手紙、『書簡全集』IV p.456

(2016 年 11 月 22 日作成、2017 年 2 月 26 日改訂)